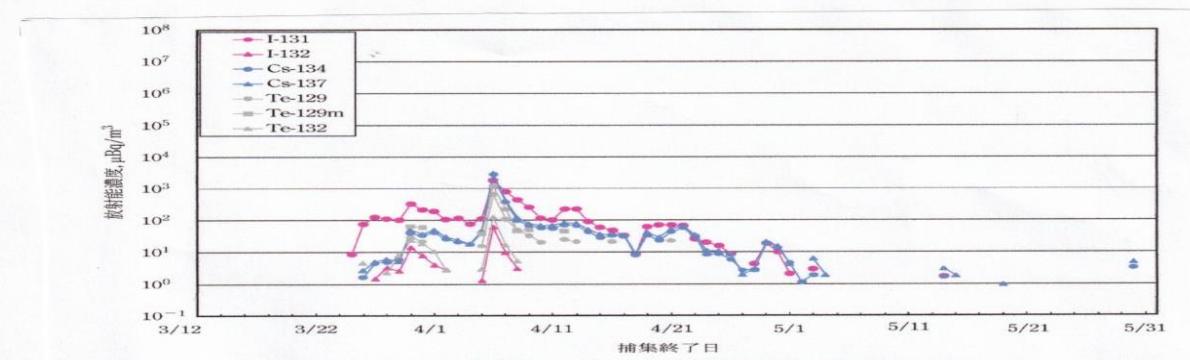
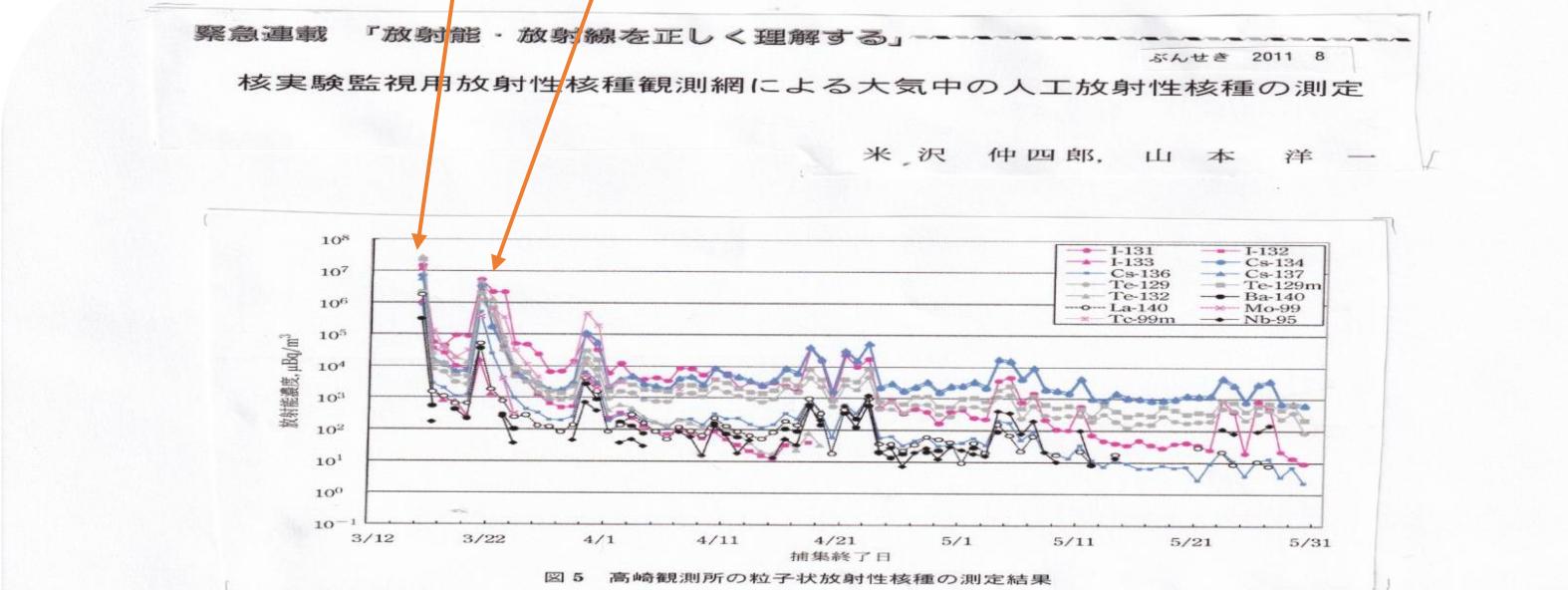


福島第一原発事故後に群馬県高崎市のCTBT高崎観測とCTBT沖縄観測所で観測された大気粒子状放射性核種の時間変化
上図：CTBT沖縄観測所には3月15日にP2、21日にP9のプルームが飛来していた。P2時の主要検核種はTe-129, Te-129m, Te-132, I-131, I-132, I-133, Cs-134, Cs-136, Cs-137である。

下図：CTBT沖縄観測所には福島第一原発から放出された粒子状放射性核種がジェット気流に乗り北半球を1周して3月24日以後に検出され始め4月7日にピーク濃度となった。検出された核種はTe-129, Te-129m, Te-132, I-131, I-132, Cs-134, Cs-137である。

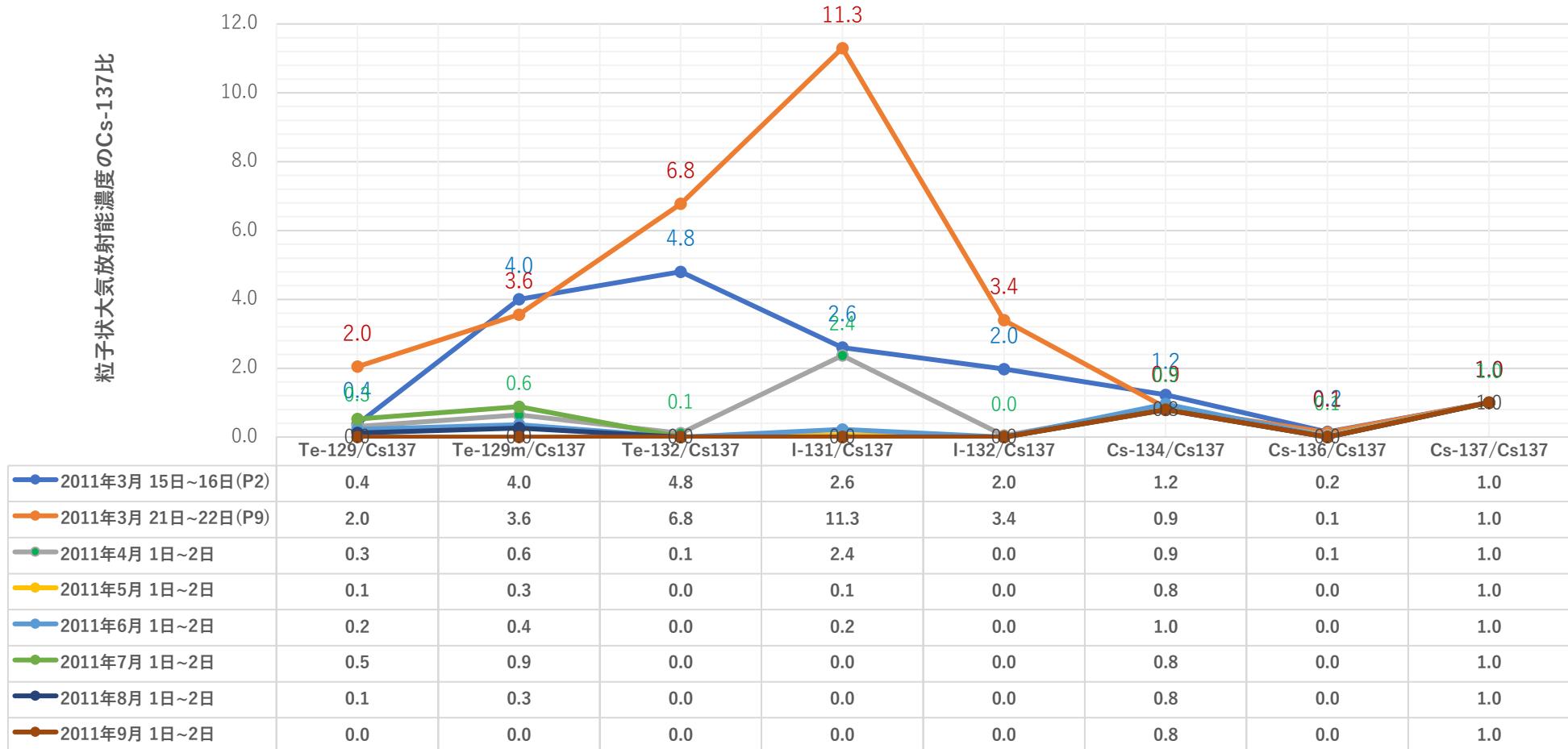


CTBT高崎観測所における粒子状大気放射能濃度・Cs-137比の時間変化

注1：2011年3月15日～16日のプルーム2におけるCs-137比は：Te-139=0.4, Te-129m=4, Te-132=4.8, I-131=2.6, I-132=2, Cs-134=1.2, Cs-136=0.2, Cs-137=1

注2：20日～21日はプルーム9が飛来時のCs-137比は：Te-129=2, Te-129m=3.6, Te-132=6.8, I-131=11.3, I-132=3.4, Cs-134=0.9, Cs-136=0.1, Cs-137=1

注3：2011年4月1日～2日、5月1日～2日、6月1日～2日、7月1日～2日、8月1日～2日は、大きなプルームが飛来していない平時のCs-137比



CTBT高崎観測所の位置と飛来プルーム（3月15日のP2と3月21日のP9）

左図（9本のプルームが掲載された論文）：題名「福島第一原発事故から放出された放射性セシウムの大気流れのモデル解説」

文献：Nakajima et al. Progress in Earth and Planetary Science(2017)4.2: DOI 10.1186/s40645-017-0117-x

右図：9本のプルーム図（矢印線で表示）と日付と場所。図中のBは二本松市、Cは郡山市、Eは矢吹町、Hは新地町、Jは南相馬地原町を示している。

